

**プロジェクト名：教育プログラムをともなった展覧会活動を通じて育む、
次世代の美術教育実践者養成プロジェクト**

プロジェクト代表者：石上 城行（教育学部・准教授）

1 研究の目的

平成20年度の中央教育審議会の答申で示された改善の基本方針を踏まえる新しい図画工作科、美術科、の学習指導要領では、造形活動の基礎的能力を育てることに併せて、「生活のなかの造形や美術の働き、美術文化に感心を持って、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度を育むことなどを重視する。」という表現が付け加えられたことにより、創造への感心と美術文化の継承を共に向上させようという狙いが、強く打ち出されている。この様な方針を背景として近年、地域の文化資産を活用したり社会教育施設などと連携したりする教育活動が様々に展開し、そのニーズは拡大する傾向にある。しかし従来の教員養成カリキュラムでは、地域と連携した教育活動を実施するために必要な経験と技能を育む機会を十分に保障しているとは、いい難い現状がある。

そこで本プロジェクト研究では、2010年10月に国営武蔵丘陵森林公園（以下、森林公園）で開催されたアートイベント「森林公園アートフェスタ2010（以下、アートフェスタ）」の関連事業として実施されるワークショップ（以下、WS）へ学生を参加させ、企画から実施運営にいたる全行程を体験することで地域社会と連携した教育活動の実際を体験的に学習、これまでの教員養成において重視されてこなかった、地域社会と共に学ぶ教育力を育む教員養成カリキュラムの構想を試みたい。特に、複雑な条件化において尚、適切な状況分析と目的意識に基づいた教材を開発し得る能力を明らかにしていきたいと考えている。

2 研究の進め方

本研究のフィールドであるアートフェスタは、2009年度に開催した同企画の2回目の実施である。今年度は、アートフェスタの初日（10月11日）を飾るWSを担当することとなり、学校教育教員養成課程美術専修の教科総合科目である「美術総合B（受講者19名）」において、その企画内容を検討する授業を行った。

（具体的な活動の進め方は、以下の通り。）

- 1回目：オリエンテーション
 - 2回目：昨年度のアートフェスタの様子と、本年度の企画意図について。
 - 3回目：アートプロジェクトの現在についてレクチャー。
 - 4回目：企画意図に基づいた討議、及び企画書の書き方について。
 - 5回目：現地（森林公園）の視察会。
 - 6～7回目：個人作成による企画案のプレゼンテーション、及びグループ分け。
 - 8～9回目：グループ毎の企画案によるプレゼンテーション。
 - 10～11回目：試作品によるプレゼンテーション。
 - 12回目：企画内容の確定とWSタイトル「きらきら☆フラワーパーティー」の検討。
 - 13～14回目：指導方法など（発話マニュアル）についての検討。
 - 15回目：授業としてのまとめと、今後の日程確認。
- 8月16日：森林公園側の担当者と学生代表（美術総合Bの受講者の内4名）との打ち合わせ。

9月：材料や道具、掲示物の準備と、指導など当日のシミュレーション。

10月11日：WS実施当日。

学生たちが考えたWS「きらきら☆フラワーパーティー」は、“森林公園に訪れる秋の妖精たちを、人々が作った花でもてなしましょう”というコンセプトのもと、クリアファイルを使って水に浮かぶ花を作るという創作活動となった。

まず案内役となった学生たちが森林公園の中央口付近で来園者に対してWSへの参加を促し、参加の意志を確認した後に、道具と材料を渡して、作り方を説明した。説明を聞いた参加者は、其々が思い描く花の形をつつたり、様々色を塗ったりしながら創作活動を楽しんだ。花の部分が完成した後に発泡スチロールの浮きをと針金の茎を取り付けて、池のほとりへと移動した。池の中では、防水服に身を包んだ学生たちが待機しており、参加者の希望に添うように水面に花を浮かべ固定していった。

最終的に参加者たちは、クリアファイルの花を2本作り、1本を待ち返りもう1本を公園の池へ浮かべて（設置して）WSの活動を終了した。



当日のスタッフとしては、美術教育専修の3年生14名（5名は教育実習の為、不参加）で対応し、午前11時から午後16時までの間に、子ども50名、保護者84名の計134名の参加者あった。最終的に134本花が池を彩り、同数の花が其々の家へ持ち帰られた（合計268本）。150名の参加者を想定して300本分の材料を準備していたが、ほぼ予想どおりの結果となったことは、驚きとともに大きな充実感につながり、1日の疲れを癒す喜びへとつながった。

3 研究の成果

WSの活動自体はその参加者数からも読み取れる通り、非常に高い評価を得た。しかし参加者アンケートなどの声を丁寧に読み込んでいくと、その評価の要因は、動の内容よりも森林公園という場の力や、アートフェスタを見に行くといった参加者自身の意欲などの、外的条件がもたらした効果ということが見えてきた。一方、学生にとっては、自分たちが企画したWSに参加してくれた親子が熱心に創作へ取り組み、おしゃべりしながら楽しむ様子を目の当たりにすることは、大きな財産となっているように見えた。

このような経験は、社会のなかで美術の活動が一般の人々に対してどのように認識・受容されているかという実態の把握に繋がると考えられる。それは、美術教育が目指す最終的な段階を垣間見ることにつながり、今後、美術科教員または、その他の美術教育に関する人材にとって大きな収穫となっているであろう。ただし、単に地域へ出かけていって教育活動を体験させるだけでは、本質的な意味における美術教育実践者としての力の養成に繋がったとは云いがたく、より内容の充実したWSなどの実践プログラムの必要性を痛感させられることとなった。